



日本読書学会読書状況調査の概況報告

○井関 龍太 (大正大学)・小山内 秀和 (畿央大学)・猪原 敬介 (北里大学)・

福田 由紀 (法政大学)・濱田 秀行 (群馬大学)・足立 幸子 (新潟大学)・平山 祐一郎 (東京家政大学)

問 題

研究や教育の文脈において読書に関する話題を取り上げるとき、成人一般の読書動向をつかむための基礎資料は重要な手がかりとなる。毎日新聞社が 1947 年より実施してきた「読書世論調査」は長らくそのような資料として取り上げられてきた(たとえば、毎日新聞社, 2020)。残念ながら、2020 年度を最後として読書世論調査は調査活動を終了した。このことは、国語教育をはじめとして読書学会で取り上げられることの多い研究テーマに広く影響する。読書に関わる調査結果が公開されるたびに本を読まないという回答の多さが嘆かれることは一般的であったが、データがなければそのように嘆いてみることもできず、読書動向に関する実態を捉えられないまま教育や読解力、文化の問題について論じることになる。そこで、日本読書学会では 2024 年 3 月に日本在住の成人の読書動向を捉えるための調査を行った。本発表はこの「日本読書学会読書状況調査」の現時点での分析結果に関する中間報告である。すべての調査項目等の詳細や性別・年代等による違いについては、最終報告において報告する予定である。

調査に当たっては、大きく以下のような方針を採用した。まずは、既存の調査との連続性を重視した。新たに調査を行うにあたり、調査研究としての視点から改めて既存の調査項目を検討すると、気になる点も少なからず見受けられた。たとえば、「一日当たり何分読むか」「一カ月当たり何冊読むか」といった項目の妥当性である。自分の読む文章の量を日々それほど正確に意識し、記憶している人は少ないのではないだろうか。また、「一日」や「一カ月」、「何分」や「何冊」といった単位は適切だろうか。読書という趣味として読む本のみが想定されがちだが、リテラシーに関する調査であることを考えると、それ以外の仕事で読む量も気になる。そうすると、本ではなく書類等を読む量を知りたくなるが、それらはどのように換算すれば回答可能な形になるだろうか。測定という観点から考えると難点は尽きない。しかし、回答者として想定される一般の成人が理解したり回答したりすることが困難な手続きを用いることは現実的ではない。また、得られたデータの最終的な利用方法を考えると、「一日何分」「一カ月何冊」といった形に集約することができないと解釈をする者にとっても利用しづらいし、過去の調査結果との連続性を検討することもできない。そこで、これらの質問項目は、読書量そのものの厳密な測定を目指すというよりも、「自分は毎日このくらい読んでいる」「ここ最近はおそらく月何冊くらい読んでいる」といった実感を反映させた回顧的報告であると捉えることにした。

とはいえ、旧来の調査項目をそのまま用いることが必ずしも適切であると思われぬ面もあった。そのひとつが読書形態の変化である。読書量の低下、いわゆる読書離れ・活字離れが叫ばれて久しいが(ただし、飯田, 2023 も参照)、その一部は読む対象が電子媒体に移行したためであるかもしれない。典型的には電子書籍が思い浮かぶが、それに限らず、スマートフォンなどでネットニュースやその他のウェブ記事を目にしない日はないだろう。また、SNS でのやり取りも、画像や動画を頻繁に利用するとはいえ、主に用いるのは文字情報であるものも少なくはない。もっと長い文章については、軽く運動をしながらオーディオブックで聴くという人も増えているのではないか。こうした読書のための媒体の変化を受けて、電子書籍やニュースサイト、ウェブ上の動画、SNS などの利用についても併せて尋ねた。その代わりに、読書世論調査では用いられていた、週刊誌や月刊誌といった区分は採用しなかった。

加えて、読書をする動機や読書に関する情報をどこから入手しているか、どんな環境の下で読んでいるかを尋ねる項目を設けた。これは、読書調査ワーキンググループの中で議論するうちに、著者らが現代の一般的な成人の読書の実態を具体的に捉え切れていない可能性に思い至ったためである。そのきっかけのひとつとなったのが『「若者の読書離れ」というウソ——中高生はどのくらい、どんな本を読んでいるのか——』(飯田, 2023)であった。飯田(2023)は、学校読書調査や学生生活実態調査などの各種調査の結果に基づいて、高校生以上の日本人(成人)は平均して月に 1~2 冊しか本を読まないと回答していることを明らかにしている。これは単年度についての議論ではなく、ここ 40 年程の一貫した結果である。この結果には、先に挙げた「読書」としてイメージされる対象の問題も関わるだろう。しかし、それでも、まったく本を読まない人や、読むとしてもそれほど多くの量や時間を費やすことのない人が想定以上に多いことを意識せざるを得ない結果である。ワーキンググループは国語教育や文章理解に関わる研究者から構成され、何より読書学会の会員でもあるので、そのような、たくさんは読まない一般の人々とは異なる、例外的といえそうな読書習慣を持っている可能性が高い。そこで、改めて広く一般の人々を想定した場合にどのような読書の実態があるかを問う質問項目を用意した。

最後に、データの比較可能性に関わる、読書世論調査との調査方法の違いについて述べる。最も大きな違いは、書面による郵送調査ではなくウェブ調査を用いたことである。これに伴い、等間隔抽出法を用いて回答を集めるのではなく、年齢と性別による層ごとに一定数の有効回

答が集まるまで回答の収集を継続する方法を用いた。このような方法を用いたことは、先行調査との予算規模の違いを考慮しての判断である。このような方法論上の違いは読書動向の連続性を捉えるという観点からは好ましくはない。しかし、読書動向についてのデータがまったく存在しなくなるよりは、一定の方針に則って収集されたデータが存在することのほうが望ましいと考えた。

方法

材料 調査項目は、人口統計学的情報、基本項目、特集項目の3つに分かれた。

人口統計学的情報としては、年齢、性別、居住地（都道府県、大都市・中都市などの年区分）、職業などについて尋ねた。

基本項目は、読書の頻度や手段について尋ねる項目であった。「読書世論調査」を参考に、直近一カ月での読書（紙の書籍、雑誌、漫画本、電子書籍など）に費やした時間を問う項目などがあつた（計28項目）。また、直近半年間での書籍（紙の書籍、雑誌、漫画本、電子書籍）などの購入数についても尋ねた。また、読書の目的や動機について尋ねる項目も用意した。項目の詳細については、結果の節で報告する際に述べる。

特集項目は、読書に関する情報をどこから得ているか、どんな環境で読んでいるかなど、読書に関する周辺的な情報を問う項目であった（計18項目）。

また、特集項目の中にはDQS（Directed Question Scale）が含まれていた。これは、回答者が質問項目の内容をきちんと把握したうえで回答していたことを確かめるためのものであつた。具体的には、選択肢（12肢）の中から特定の2つを選択するように求める内容であった。

手続き オンラインで調査会社に依頼して実施した。

調査回答者 調査会社のパネルに登録している候補者から条件に合致する回答者が3,000名を超えることを目指して募集した。回答者の年齢は、18～29歳、30歳代、40歳代、50歳代、60歳以上の5区分に均等になるようにした。性別については、基本的には男女均等に割付けし、「その他」もしくは「答えたくない」との回答が得られた場合には、その回答者は募集区分上はその人と同じ年齢区分の男女のうち少ないほうのグループに属するものとみなして調査を継続した（集まった回答数に基づいて募集を停止する調査計画であつたため）。

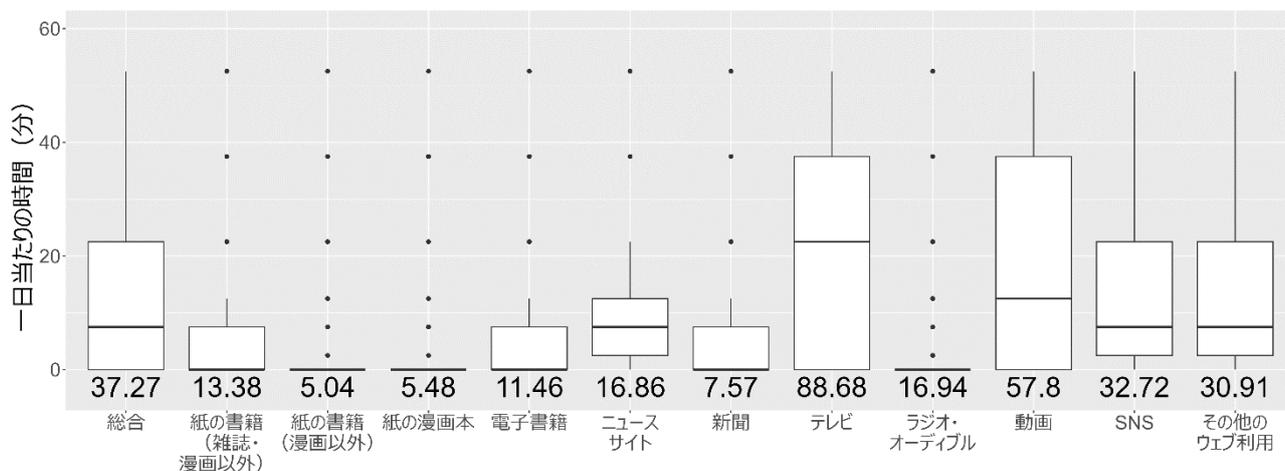
調査終了までにDQS項目に指定通りに回答しなかった者は1,657名であつた。したがって、適切な回答の割合は64.4%であつた。DQS項目に指定通りに回答した3,000名の回答を分析対象とした。

結果

基本項目 各媒体について一日あたりに費やした時間を図1に箱ひげ図としてまとめた。回答者にはここ1カ月での状況を思い浮かべて「0分（読まない）」「0分以上5分未満」といった選択肢の中から最も当てはまるものを回答することを求めた（最大で「180分以上」）。図示に当たっては、選択された回答を各範囲の中央値に置き換えることで数値化した。「総合」の項目には「紙の書籍・雑誌・漫画本・電子書籍・新聞のすべてを含む」と説明してあつたので、これらすべての媒体についての読む時間と捉えられる。「0分（読まない）」という回答は、966件であつた（全体の32.20%）。第73回読書世論調査における総合の不読率は33%であり前年から横ばいであつたと報告されている（毎日新聞社、2020）。また、「0分（読まない）」という回答を除いた場合の平均は54.97分であつた。第73回読書世論調査における、何らかの本を読むという人に限った平均読書時間は57分であつた。「紙の書籍（雑誌・漫画以外）」についてまったく読まないという回答は1,776件（59.20%）であり、

図1

一日当たりの読書及び関連行動に費やす時間



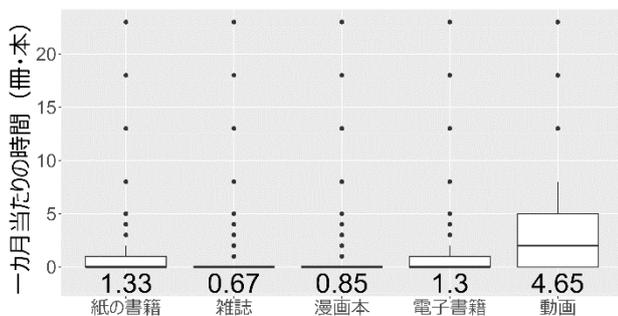
注) 各ボックスの下に平均値を記した。なお、描画領域外の外れ値も存在する。

これらの回答者を除いた上での平均は32.79分であった。「電子書籍」については読まないという回答は1,967件(65.57%)であり、これらを除いての平均は33.28分であった。

各媒体について一か月当たりの読書冊数及び視聴時間を図2に箱ひげ図としてまとめた。回答者にはここ半年での状況を思い浮かべて「0冊」「1冊」「6~10冊」といった選択肢の中から最も当てはまるものを回答することを求めた(最大で「21冊以上」; 動画については単位を「本」とした)。図示に当たっては、選択された回答を各範囲の中央値に置き換えることで数値化した。第73回読書世論調査における書籍の平均読書冊数は1.1冊で、前年から横ばいと報告されていた。

図2

一か月当たりの読書冊数及び動画視聴数



注) 各ボックスの下に平均値を記した。なお、描画領域外の外れ値も存在する。

自分の本(紙の本のみ、雑誌・漫画を除く)及び電子書籍(雑誌・漫画を除く)として所有する冊数についての回答を表1に示した。成人で自分の本を1冊も所有していないという回答は28.63%であった。一方、電子書籍についてはまったく所有していないほうが多数派であった(72.93%)。

表1

所有する冊数

	本	電子書籍
0冊	859	2188
1~20冊	895	449
21~50冊	475	156
51~100冊	319	86
101~200冊	205	52
201~400冊	97	26
401冊以上	150	43

注) いずれも雑誌・漫画を除く

同様に、一か月にこれらの媒体について費やす金額について尋ねた回答を表2にまとめた。紙の書籍の購入に費やす金額は、買わないという回答を除けば1ヶ月当たり1,000円未満との回答が最も多かった。電子書籍についても同様であったが、買わないという回答がより多かった。

表2

一か月に書籍等に費やす金額

	本	電子書籍
買わない	1655	2394
1,000円未満	779	368
1,000~2,000円未満	306	130
2,000~3,000円未満	118	59
3,000~4,000円未満	45	18
4,000~5,000円未満	19	5
5,000円以上	78	26

注) サブスクリプションを除く

電子書籍については、1件ずつ購入するのではなく、サブスクリプションサービスを利用している可能性も考えられる。そこで、電子書籍のサブスクリプションサービスに加入しているか尋ねたところ、「加入していない」という回答が2,840件、「1件加入している」が140件、「2件以上加入している」が20件であった。

次に、読書の目的について、教養のため、実用(仕事・勉強など)のため、娯楽のための3つの領域に分けて尋ねた。ここ1か月の間にこれら3つの目的のためにどのくらいの本(紙の書籍と電子書籍を含む)を読んだか、おおよその割合をパーセンテージで回答することを求めた。回答は選択式で合計100%となるように選択するよう指定した。この項目に対する回答を表3にまとめた。

表3

目的ごとの読書エフォート率

	教養	実用	娯楽
0%	1929	1960	1054
10%	198	190	52
20%	410	385	248
40%	253	253	211
60%	121	98	241
80%	48	57	342
100%	38	54	849

これら3つの目的のそれぞれのために1か月平均でど

のくらい紙の書籍及び電子書籍にお金をかけるかについても尋ねた。この項目に対する回答を表4にまとめた。

表4

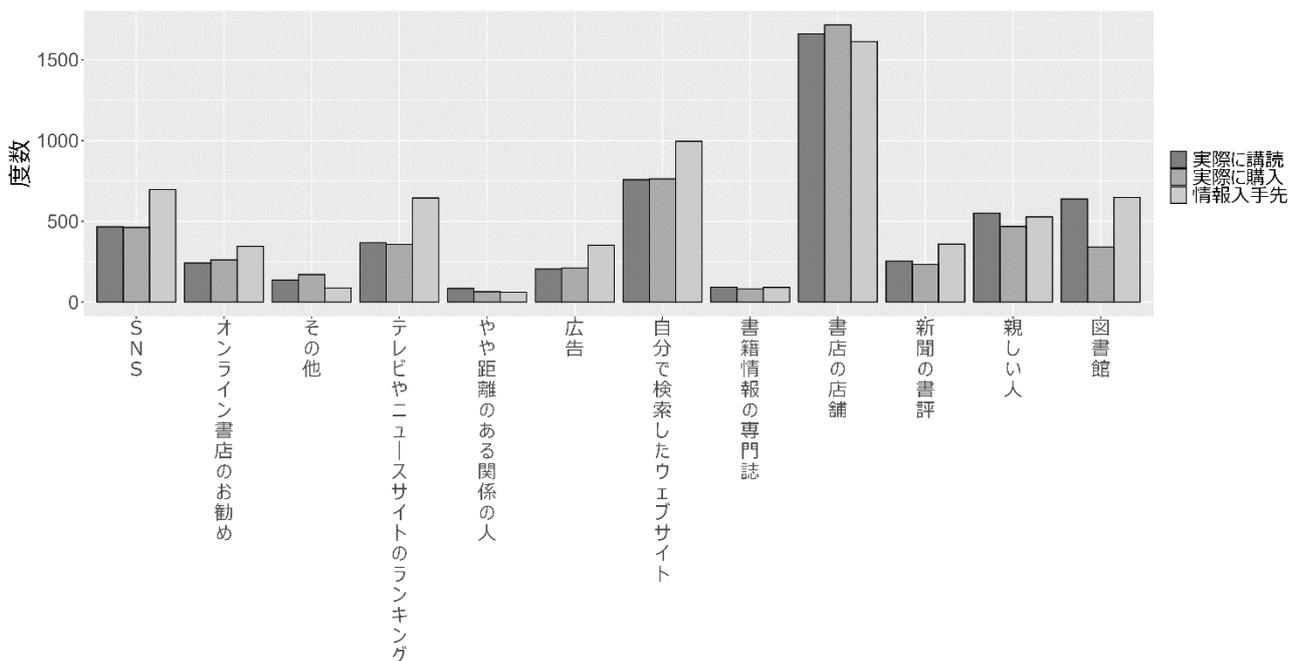
読書目的ごとの一か月に費やす金額

	教養	実用	娯楽
買わない	2064	2106	1504
1,000円未満	591	538	798
1,000～2,000円未満	226	221	392
2,000～3,000円未満	55	77	150
3,000～4,000円未満	29	19	46
4,000～5,000円未満	4	11	18
5,000円以上	28	25	89

特集項目 書籍に関する情報源について尋ねた。ふだんどんなところから本の情報を入手しているか、それらの情報源から知った本を実際に買ったことがあるか、それらの情報源から知った本を実際に読んだことがあるかについて選択式で回答を求めた。これらの項目に対する回答を図3にまとめた。いずれの問いについても「書店の店舗」の選択が最も多く、「自分で検索したウェブサイト」がそれに次いだ。3番目に多かったのは、情報入手先としては「SNS」であるのに対し、実際に講読するのは「図書館」、実際に購入するのは（僅差ではあったが）「親しい人」と分かれた。

図3

書籍に関する情報源



ふだん読書する状況について尋ねた。ここでいう状況は、具体的には場所を取り上げているが、時間帯や生活の中での文脈も反映することを意図している。このときの読書する対象には電子書籍を含めた。この項目に対する回答を表5にまとめた。「その他」の回答として最も多かったのは「読まない」(75件)、次いで「読んでいない」(20件)であったが、3番目に多かったのは「病院」(10件)であった。

表5

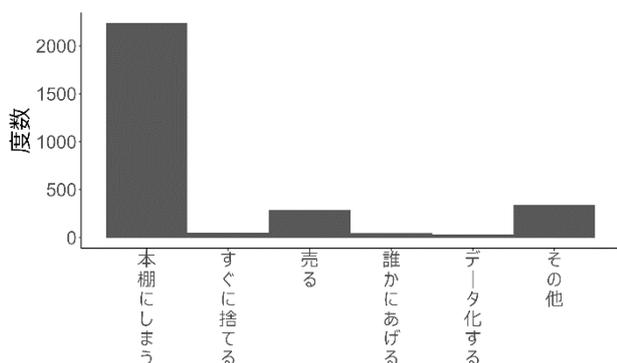
読書する状況

自分の部屋（主に自分だけが使用する部屋）	1956
居間（家族といっしょに過ごす部屋）	1036
学校や職場	215
トイレ	88
風呂	48
図書館	207
カフェ	188
レストラン	34
ホテル	21
電車やバス	440
公園	224
その他	224

第73回読書世論調査から個人の蔵書数が少ないことがうかがわれ、フリマアプリでの本の売買についても尋ねていることから（毎日新聞社,2020）、現代の成人読者は読み終わった本を蓄積しない可能性が考えられた。そこで、読み終わった本をどのようにすることが多いかについて尋ねた。この項目への回答を図4にまとめた。その結果、「本棚にしまう」という回答が多数を占め（2,240件、74.67%）、現代でも読んですぐに本を手放す人は多くはないことが示唆された。

図4

読み終わった本の扱い



考 察

日本在住の成人を対象とした読書動向についての調査を行い、現時点での分析結果を報告した。過去の読書世論調査とは異なり、郵送調査ではなくウェブ調査を用いたが、おおむね連続性の高い結果が得られたと考える。読書時間や読む冊数は第73回読書世論調査の結果に近いものであった。これらの値はここ40～50年の調査結果から大きく外れるものではない（飯田,2023の図14を参照）。ウェブ調査を用いたことにより、回答者がウェブを利用できる環境にあり、ウェブを使用することに比較的抵抗の少ない者に限られることも懸念されていた。また、あらかじめウェブ調査会社のパネルに登録している者のみが回答者となりうることも母集団の偏りを生じる可能性がある。しかし、これらのことは読書動向をつかむという目的にとっての妨げにはならなかったのかもしれない。本調査の結果からは、ウェブを活用できることや調査協力が積極的であることは必ずしも本や文章を好んで読むことと結びつかないことが示唆された。このことは読む時間や量についての回答に限らなかった。たとえば、読書する状況についての質問に対しても、「その他」の自由回答として自分は決して読書するつもりがないことを強く訴える回答がみられた。

読む時間や量が少ないこと、読書に対する抵抗もしくは遠慮を示すような回答がみられることは「読書」というものに対する既成概念が強く働いているためかもしれない。本調査では、読む時間を尋ねる項目の選択肢として「0分（読まない）」と0分の選択肢のみあえてかっこ書きで「読まない」という注釈をつけた。これは、本を読みたいのだけれど忙しくて時間がない、こんなに

少ししか読んでいないのだから（実際は0ではないが）0分の選択肢がふさわしいと考えるような回答者が遠慮して少ない時間を報告することのないように、明確な意思をもって読まない回答者のみが0分を選択することを意図したものであった。このような措置にもかかわらず、読まないという回答の割合が先行調査と同程度であったということは、年来の高い不読率は遠慮の結果ではなく、読書しないという意思の表れであったのかもしれない。「0分（読まない）」を選択した人々（回答者全体の32.20%）が日々一切の文字列を読むことなく生活しているとは考えにくい。おそらく、「読書」に含まれるのは、仕事や勉強などの都合から強制されることなく、自発的に行われた趣味としての活動に限られるといった判断がなされたのではないだろうか。また、そこでの「読書」の対象となりうる文章の種類も小説や学術的著作が想定されており、技術書やレシピなどは除外されているのかもしれない。これらのことは、「読書」とは何かという本質的な問いを改めて投げかける。一般の人々が何を「読書」と考えるのか、調査して記録すべきほどのような活動の時間や量であるのか、「読書」と見なされない読みの活動をどのようにしたら捉えることができるのかなど、読書の科学を推進する者にとって多くの課題が提示されたといえる。

本調査においては、読書に関する新習慣といったものはそれほど顕著ではなかった。電子書籍を読む時間や量は紙の書籍に匹敵するものの、所有数や金額、サブスクリプションサービスの利用に関する回答から考えると、まだ利用したことがない回答者が相当数いたものと思われる。また、書籍に関する情報についても、書店の店頭で情報を収集し、買って読むという回答が少なくなかった。オンラインの情報も利用されていないわけではないが、店頭に比べれば利用の度合いは大きく下がる。読書する状況は自室や居間などの自宅が多く、次に電車やバスなどの移動時が挙げられた。かつては公共交通機関による移動時間にできることといえば本や新聞を読むことくらいしかなかった。そのような時間こそが読書の習慣をもたらしたという見方もある（永嶺,2023）。車中読書のシェアについてはスマホ利用との競合についてさらに検討する余地があるかもしれない。また、本を読み終わってすぐに手放すのは若い年代の読者に特徴的であるかもしれない（毎日新聞社,2020）。利用できるデータによって分析可能な論点については追って報告したい。

引用文献

- 飯田一史 (2023). 「若者の読書離れ」というウソ——中高生はどのくらい、どんな本を読んでいるのか——平凡社
- 毎日新聞社 (2020). 読書世論調査 2020年版——第73回読書世論調査 第65回学校読書調査——毎日新聞社
- 永嶺重敏 (2023). 読書国民の誕生——近代日本の活字メディアと読書文化——講談社

本原稿は、第68回日本読書学会発表要旨集（pp.51-55）に採録されたものです。